
IS インフィニット・ストラトス 宿命を変える奇跡の双騎士

陽炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス 宿命を変える奇跡の双騎士

【Nコード】

N3856BA

【作者名】

陽炎

【あらすじ】

インフィニット・ストラトス

ISそれは女にしか動かせない飛行パワード・スーツ。そのISを男でありながら動かしてしまった少年、織斑一夏。一夏はIS学園で出会った仲間達と共に幾度の危機を乗り越えてきた。だが一夏の目の前にISを動せるもう一人の少年が現れた。その少年と出会った事で一夏の宿命と世界が大きく変わる…。

これはISの二次創作小説です。作者は文才が無いに等しいうえに小説を書くのはこれが初めてです。どうか暖かい目で見てください。

プロローグ（前書き）

作者の初投稿小説です。

今回はプロローグです。

プロローグ

IS インフィニット・ストラトス 正式名称 宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。発表当初は世界はISを認めようとしなかった。だがIS発表から一ヶ月後に起きた『白騎士事件』で世界中にISのスペックの高さが知れ渡った。ISの前では現在の戦闘兵器はただの鉄クズに等しくそれ故に世界の軍事バランスは崩壊した。しかも開発者の篠ノ之束が日本人だったので、日本は独占的にIS技術を保有していた。危機感を募らせた諸外国はIS運用協定『アラスカ条約』によってISの情報開示と共有、研究のための超国家機関設立、軍事利用の禁止等が決められISは『スポーツ』としての利用にと落ち着き所謂パワード・スーツとして世界中がISの開発と操縦者の育成に力を入れる事になったが、ISには致命的な欠陥があった。それは女にしか使えないと言う事だ。IS操縦者がどれだけ揃っているかで世界の軍事力（正しくは有事の際の防衛力）へと繋がる。そして操縦者は女のみ……となると、どの国も率先して女性優遇制度を施行した。これによって『女』偉いという構図はあつた。という間に浸透し、IS発表からの十年で女尊男卑の社会へと変化した。だが日本で女にしか動かせないISを十五歳の少年が動かし世界初の男でISを動かせる存在が現れた。その少年は唯一ISを動かせる男として日本国が運営管理するISの操縦者育成機関、特殊国立高等学校・IS学園に入学させられた。この一件で少年の宿命さためが大きく変わる事になる。

七月八日。二泊三日の臨海学校が終えた国立IS学園一年生及び教師を乗せたバス四台が学園への帰り道を走行しており、あと数分もすれば学園に到着する。

「すー……すー……」

四台のバスの一台一年一組のバスの中で一人の黒髪の少年が穏やかな寝息をたてながら寝ているこの少年こそ世界で唯一ISを動かせる男にして一組のクラス代表、織斑一夏である。

「…夏、一夏起きて…」

もうすぐ学園に着く為か濃い金髪を首の後ろで束ねた少女が横で寝ている一夏を優しく揺すりながら起こす。この少女の名前はシャルロット・デュノア。フランス代表候補生でありデュノア社の社長の実子である。当初は二人目の男性IS操縦者、シャルル・デュノアとしてIS学園に転入したがふとした出来事で一夏に正体がばれ学園を去ろうとしたが事情を知った一夏の真摯な説得で学園に残るのを決め、改めて女子として転入した。その一件で自分に居場所を与えてくれた一夏に好意を抱いている。彼女が何故男子のふりをしていた理由は、また別の機会に……

「ん…んあ……シャル…ロット？」

シャルロットの声で一夏は起きたらしくシャルロットの名前を呟く。

「おはよう一夏。」

「おはようシャルロット、起こしてくれてありがとう。」

一夏はシャルロットに起こしてくれた事に微笑みながら礼を言う。

「い、いいよお礼なんて！」

「ん、そうか？」

『い、言えない。一夏の寝顔を堪能してた何て絶対に言えない！あ
あでも一夏の寝顔可愛かったなあ。』

シャルロットはさっきまで見ていた一夏の寝顔を思い出して微笑んでいた。

「まったく…おい一夏！しゃっきとしろ、もうすぐ学園に着くぞ！」

一夏に対して黒髪をリボンで縛ってポニーテールにしている少女が少しきつめの口調で話し掛ける。この少女の名前は篠ノ之箒。ISの制作者、篠ノ之束の妹にして一夏とは幼なじみである。一夏に恋心を抱いているのだが六年ぶりにIS学園で再会した一夏に対して素直になれない所謂ツンデレである。

「わ、わかってるよ箒…」

一夏は箒の少しきつめの口調に若干たじろぎながら返事をする。

「嫁よそんなに寝たれば…後で私が添い寝してやる／＼／」

輝くような銀髪を腰近くまで長くおろし左目に眼帯を付けた少女が若干照れながら言う。この少女の名前はラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツ代表候補生にしてドイツIS配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』-通称黒ウサギ隊の隊長である。当初は敬愛する織斑千冬の経歴に泥を塗ったとして一夏の事を嫌悪していたがある事件の際に自分を救ってくれた一夏に惚れ以後一夏を嫁にしようとアプローチをしている。何故婿ではなく嫁なのかそれはまた別の機会に…

「ちよつ、ラウラさん！今の発言聞き捨てなりませんわ！」

その発言を聞いた薄い金髪を縦ロールにした少女がラウラに対して批難を込めた声色で文句を口にする。この少女の名前はセシリア・オルコット。イギリス代表候補生にしてイギリスの名門貴族オルコット家の当主である。入学当初は一夏に対して高圧的かつ蔑視した態度をとっていたがクラス代表決定戦を経て一夏の姿が自分の理想の男の図と重なり、入学当初は一夏に対して高圧的かつ蔑視した態度をとっていたがクラス代表決定戦を経て一夏の姿が自分の理想の男の図と重なり、一夏に対して好意持つようになった。

「まあまあセシリア、そんなに怒らないで。」

「そうだよせっし、落ち着こつよ。」

クラスの中で一番のしつかり者の鷹月静寂といつものほほんとしているのほほんさん（本名、布仏本音）の二人がセシリアを宥めるがセシリアはまだ不満げだ

黒いサマースーツにタイトスカート、すらりとした長身、よく鍛えられているがけして過肉厚ではないボディライン。狼を思わせる鋭い吊り目をした女性、一年一組の担任織斑千冬の指示が飛ぶ。織斑千冬、第一回『モンド・グロツソ』総合部門及び格闘部門優勝者して織斑一夏の姉である。現役時代は公式戦無敗を誇り世界最強のIS操縦者でありIS世界大会『モンド・グロツソ』二連覇も確実に言われた。だが第二回『モンド・グロツソ』総合部門決勝戦当日に一夏が謎の組織に誘拐され一夏を助かる為に決勝戦を棄権した。この一件は当時大きな話題となった。その後一夏の監禁場所を提供したドイツ軍に『借り』ができた為一年程ドイツ軍のIS部隊の教官を務めた後、現役を引退しIS学園の教師に赴任した。千冬の指示に従い生徒達がバスを降りていく。現役時代の強さと美貌から学園には彼女のファンや憧れを持つ生徒が多く千冬にはブリュンヒルデという呼び名が付いている。だが本人はこの呼び名を嫌っているのは余談である。そして彼女の指導は厳しい。それを知っている生徒達は順調にバスから降りていく。四台のバスからIS学園一年生がわらわらと降りてきてクラス事に整列した。

「よし全員降りたな。ではこれにて臨海学校を終了する、解散！」

千冬の解散の声を聞き生徒達は自分達の部屋に戻る。そう、ここIS学園は全寮制である。生徒はすべて寮で生活を送る事が義務付けられている。これは将来有望なIS操縦者達を保護する目的もある。一夏も学園の生徒である為例外ではない。一夏は寮の自分の部屋に向かった。

Side 一夏

『ふ〜、三日ぶりだな〜IS学園。なんだか久しぶりに帰って来た感じがするな。まあ臨海学校じゃ色々あったからな〜』

部屋に着いた俺はベットに座り臨海学校での出来事を思い出していた。今回の臨海学校では二日目…つまり昨日トラブルが起きた。アメリカ・イスラエル共同開発の第三代型の軍用IS『銀の福音』シルバリオ・ゴスベル通称、福音が制御下を離れて暴走しその福音の対処を俺達専用機持ちがする事になった。作戦会議の結果俺と篤が福音を撃墜する事になったんだけど……？

「作戦は失敗……俺は重傷を負って意識を失ったんだよな……」

福音の攻撃を受けて俺は意識を失った。しばらくすると俺は不思議な空間にいた。そこで謎の少女と白い騎士の女性に出会った。そして白い騎士の女性にこう聞かれた。

「力を欲しますか」

力が欲しいかと聞かれた俺は力が欲しいって答えた。不条理や理不尽な力から、この世界で一緒に戦う仲間を守る為の力が欲しいって。そう答えた直後に空が、世界が、眩いほどに輝いて目の前の光景が遠くばやけていった……。

「ん……ここは……」

目を覚ますと俺は旅館の一室で体中に包帯を巻かれて寝ていた。どうやら福音にやられて意識を失っていたようだ。

「そうだった…俺は福音に…！、そうだ！みんなは！」

俺はは『コア・ネットワーク』を使い福音とみんなが今どこに居るか搜索した。そしてみんなが福音と戦っていると知った。

「こうしちゃいられねえ！」

俺は布団を飛び出し包帯を取って白式を起動させた。

「！こ…これは！」

俺は驚いたなぜなら白式の姿が変化していたからだ。「『セカンド・第二形態移行』シフト第二形態・雪羅…」俺は進化した白式の名を口にした瞬間、さっきの光景を思い出した

「力を欲しますか。」と問い掛けた白い騎士の女性と自分をの手に取った少女を…

「ありがとう…これなら…これならいける！」

俺は感謝の言葉を口にして急いでみんなの所に向かった

『でも…白式だけじゃなくて福音も第二形態移行してたのには驚いたな…』

そう福音も第二形態移行をしておりその圧倒的な性能で一夏が駆け付けた時には筈以外のメンバーは福音によって落とされていた。第二形態移行によって左腕に現れた『アームド・アーム多機能武装腕』雪羅で福音を押し始めるもエネルギー切れの危機に陥り紅椿の単一使用能力『ワンオフ・アビリティ絢爛舞踏』のエネルギー回復によってかろうじて福音の撃墜に成功した。

「あの時は…ホントにギリギリだったな…」

「なあーにがギリギリだった？」

考えが声に出ていたのか茶髪をツインテールにした小柄な少女が一夏にその言葉の意味を聞く。この少女の名前は凰鈴音 ファン・リンイン 一年二組クラス代表。中国代表候補生にして一夏のもう一人の幼なじみである。愛称は鈴。一夏いわく小学一年から四年の終わりまで一緒に過ごした篤がファースト幼なじみ。篤が転校した直後の小学五年の時に転校してきて中学二年まで一緒に過ごした鈴がセカンド幼なじみとの事。幼なじみにファースト、セカンドと付けるのは世界広しといえど一夏ぐらいだろう。彼女も一夏に好意を寄せているが素直になれない。篤と同じくツンデレである。今まで出番が無かったのは彼女が二組だからである。決して鈴は二組だからいないと言ってはいけない。

「ああ…鈴ちよつとな…ってなんでここに居るんだよ?!」

一夏は鈴が何故鈴が自分の部屋に居るのか驚きつつも尋ねる。

「なんでって…あなたに用があるから部屋に来たのにノックしても返事がないし…もしかしたらと思ってドア開けたらあなたベットに座ってぼーっとしてたから声をかけたのよ。」

「ああ…そうだったのかゴメン。ちよつと考え事してて…で、鈴の用事って何だ？」

一夏は鈴に謝罪し鈴の用事を聞く

「あっそ、用件は千冬さんからの伝言、職員室に反省文の原稿用紙取りにこいつて…」

「あ……そうだった……」

鈴の言葉を聞いた一夏は思い出した。二度目の福音へのは一夏達の独自行動。それは重大な命令違反であり福音を撃墜して旅館に戻つてすぐに大広間で全員30分以上正座させられた。そして学園に帰つたらすぐに反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングが待っている事を…

「あー…こりゃあすぐに職員室に行った方がいいな…」

「そうね早く行った方がいいわよ。あんた以外はもう反省文の原稿用紙受け取ってるし。」

「げっマジかよ！、そりゃ早く行かねえと。でなきゃ千冬姉に怒られるうえに出席簿で叩かれる…」

一夏は叩かれた事を思い出したのか頭をさする。

「ははは…あれは痛いわよね…」

一夏の言葉に鈴は苦笑いを浮かべ自分も叩かれた事を思い出し頭に

手を宛てる。

「じゃあ職員室に行ってくるよ。伝言ありがとな鈴」

「まったくよ、お陰で反省文書くの送れたじゃない。今夜デザート奢りなさいよね！」

「わかったよ…じゃあな鈴。」

鈴にデザートを奢る事を承諾し一夏は職員室に向かい歩き出した。

「失礼します。千冬ね…織斑先生はいらっしゃいますか？」

職員室に着いた一夏は挨拶をしてから職員室に入室し千冬が居るかを尋ねる。

「ようやく来たか織斑、こっちだ。」

千冬は書類を整理しながら一夏を呼ぶ。一夏は千冬のいる机に向かう。

「織斑先生、反省文の原稿用紙を受け取りに来ました。」

「ああ、わかっている。今回の反省文は百枚だ」

そう言っつて原稿用紙をドサツと取り出す。

「ひゃ、百枚ですか…」

「福音を撃墜したとはいえ二度目の襲撃は重大な命令違反だ、百枚でも少ないくらいだぞ。それとも何か、百枚じゃ物足りないのか？」

そう言っつて千冬は不敵に微笑む。

「いえ充分です！」

一夏は即効で否定する。百枚でも多いのにこれ以上増やされたらたまったもんじゃないだろう。

「ならさっさと部屋に戻って反省文を書け。期限は明日の昼休みが終わるまでだ。懲罰トレーニングはこちらの都合により明日の放課後だ、覚悟しておけ。」

そう言っつて原稿用紙を一夏に渡す。

「わ、わかりました。それでは、失礼します。」

一夏を顔を引き攣らせながら原稿用紙を受け取るが、トレーニングが明日なのを知っつて若干安堵して職員室を後にした。

Side 千冬

「ふう……」

一夏が職員室を出た少し後、私は小さく息を吐く。

『まったく……今年はやたらと問題が起きるな』

私は今年起きた出来事を思い出していた。一夏が世界で初めて男でISを動かした事から始まった。一夏は身柄を保護とゆう半ば強制的な理由でにIS学園に入学。入学してからはやたらと騒動や事件が起きている。

「織斑先生、どうかされましたか？」

一人の黒緑眼鏡をかけた女性が私に声をかける。彼女の名前は山田真耶。なんとというか『子供が無理をして大人の服を着た』感じがあがるが一年一組の副担任で元日本代表候補生だ。実力も量産機でオルコットと凰を二人まとめて倒す程の実力がある。

「ああ……山田先生。ちよつと考え事をね」

「考え事ですか？」

「ああ。今年はやたらとトラブルが起きていだろう。その事についてな。」

私は山田先生に何を考えていたのか説明した。

「そうですね……今の所今年の学園行事は全部事件が起きていますもんね……」

「ああ……」

山田先生の言うとおり今年に入ってから学園行事では全て事件が起きている。クラス対抗戦では謎の無人IS『ゴレム』の襲撃、学年別トーナメントではラウラのISにVTシステム『ヴァルキリー・トレース・システム』が積まれており暴走、先日の臨海学校では銀の福音が制御下を離れて暴走した。

「まったく、今年はやたらと問題が起きて困る。そして事件の際にはいつも……」

「織斑君が巻き込まれる……ですか？」

「ああ。はあ、まったく……あの馬鹿は人の仕事を増やして困るよ……」
私は溜め息をつく。

まったく……心配ばかりかけおって……

「でも織斑先生、織斑君に何かあった時、いつも一番心配しているじゃないですか。」

「ま、まあ弟の心配をするのは姉として当然だろう……」

『たった一人の家族なんだ、心配するに決まっているだろう！』

そう織斑千冬は普段一夏に厳しいが実際は一夏の事をとても大切に思っている。まあ俗に言うブラック……このコメントは削除されました。

「あつ！織斑先生照れてるんですかー？ 照れてるんですねー？」

「……………」

ぎりりりりっ。私は無言のまま山田先生にアイアンクローを食らわせた。

「いたたたたたたっ！！！」

「山田先生…前にも言ったはずだ。私はからかわれるのは嫌いだと。」

「わ、わかりました！わかりましたから離し……あつあつあつあつ！！！」

職員室に山田先生の叫び声が木霊した。

「まったく、山田先生は……」

私は山田先生を解放した後再び考えに浸った。今年のIS学園は異常である。世界初の男のIS操縦者の入学、度重なる専用機持ちの

転入と学校行事の度に起こる事件。その全てに一夏が関わっている事から間違はなく一夏が目的だろう。一夏がISを動かした事により世界は少しずつだが変化しつつある。

『私は教師として姉としてあいつを守り、正しい方向へと導こう。』

私は自分が今一夏にできる事をするに心に決めた。

S i d e 千 冬 E n d

某所。綺麗に清掃された一室で白衣を着た灰色の髪の男性の科学者がキーボードを入力しながら空中投影のディスプレイに浮かび上がったISの各種パラメータを眺めている。

「稼動率100%…稼動時間は……も十分、各種システム異常無し。よし、後はシステムの調整だけだ」

白衣を着た科学者はうつすらと笑みを浮かべながらそのISをみる。そのISとISを纏った人物を見る。操縦者の身体全体を覆う『全^ル身^ス装^キ甲^ン』。その姿はまるで悪魔だ。漆黒で塗り潰された装甲の所々に施された真紅のカラーリング。それはまるで身体にこびりついた

血液のように見える。その悪魔のようなISは見ただけで恐怖さえ感じさせる。

『準備ができたのか?』

そのISを纏った操縦者が声を発する。その声は普通の人間の声ではなく機械を通して変換された中性的なマシンボイスだ。

「ああ。まずは手始めにここを襲撃してもらおう。」

そう言って科学者はキーボードを操作しディスプレイに襲撃場所の情報を浮かべる。

『ドイツ軍のIS部隊シュヴァルツェ・ハーゼ…』

「そつだ。その第三世代型IS『黒い枝』シュヴァルツェア・ツヴァイクを含む三機を倒してこい。操縦者や周りの人間は殺しても構わん。」

そう言っつて科学者は冷酷な笑みを浮かべる。

『……………』

「なんだ?何か文句でもあるのか?」

『いや…ない…』

「そつか、なら準備ができ次第襲撃する。それまで部屋に居ろ。」

そう言いながら科学者はISの最終調整に入る。

『わかった…』

悪魔のようなISの操縦者はISを解除した。ISを解除したその場所には黒髪の少年の立っていた。年齢は一夏達と同年代であろうか。少年は顔の左側、左腕、両足の膝から下、に包帯を巻いている。その姿はあまりに痛々しい。長く伸びた後ろ髪は首の後ろで纏めている。前髪は目に掛かっておりそこから鋭く切れ長な右目が見える。先程まで纏っていたISは待機形態の悪魔をあしらったネックレスとなり首に掛かっている。

「では俺は部屋に戻る。準備ができたら呼べ」

そう言って少年は自分の部屋へと戻っていった。

「さてと…さつさと機体の調整を終わらせるとするか、私が製作したこの…『悲劇の復讐者』トランジェイ・アヴエンジャーを！」

悲劇の復讐者…この機体の名前が意味する物とは……

「よつやく…この時が来たか…」

部屋に着いた少年は一人呟く。

「もう少しだ…もう少しで俺はあいつに復讐できる…」

復讐…その言葉を口にした途端、少年の表情に憎悪と怒りが現れる。

「あいつの…あいつのせいで俺は！俺は絶対に許さない…俺は絶対に…あいつを殺してやる！」

そして少年は復讐の対象となる人物の名を口にする。

「待っている……………織斑一夏！」

怒りと憎悪を含んだ声が部屋に響いた

織斑一夏とこの少年。数奇の宿命に翻弄される二人の少年が出会う

時、新たな物語が幕を開け少年と一夏達の宿命が大きく変わる。そしてその瞬間が今、刻一刻と迫っている。

プロローグ（後書き）

陽炎「どうもはじめまして。この小説の作者の陽炎でございます。」

一夏「どうもはじめまして。ISの主人公織斑一夏だ。」

作者「いやープロローグなのに長かったなー。」

一夏「まったくだ。しかもISとキャラの説明が殆どだし……」

作者「そこはまあ……大目に見てよ……、それより一夏……お前いきなり殺すって言われてるけどどう思う?」

一夏「どう思うって……まったく思い当たる節がねえ……」

作者「まあ彼が一夏を憎む理由は次回から始まる本編で明らかになるからね。」

一夏「そうか……じゃあ最後に、この小説を読んできた皆に……」

「この小説を読んでいただきありがとうございます。これからもこの小説をよろしく願います。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3856ba/>

IS インフィニット・ストラトス 宿命を変える奇跡の双騎士

2012年1月9日23時45分発行